

(日置郡吹上町永吉砂走)

### 位置と環境

薩摩半島は、九州山脈の支脈の金峰山地が丘陵性の低い山地となって、中央を南北に走り、東斜面は急傾斜で鹿児島湾に望むが、西斜面は緩傾斜で東シナ海に望み海岸は吹上浜の大砂丘となり、山地帯との間に細長い平地が形作られている。西斜面には西流する数個の小河川によって横谷が形成され、これらの谷が鹿児島湾岸と西岸との交通路となっている。

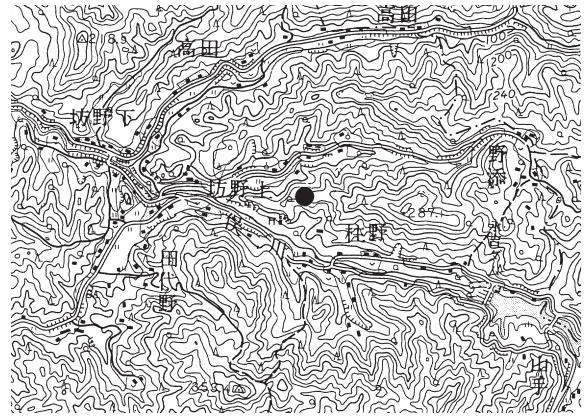
洞穴は、これらの横谷の一つを形成した永吉川の支流の二俣川の浸蝕によってできた、若い谷の北斜面に存在している。遺跡地付近は、凝塊岩またはシラス層からなり、80～100mの高さに断崖が形成されている。これらの断崖の基部に、水食によって洞穴が穿たれ、ここに遺跡が形成されている。

黒川洞穴は、西海岸より6.5m、標高84mに大小2個の洞穴が隣接して開口している。西側の大洞穴は、シラスと凝塊岩からなり、入り口の幅は13.3m、高さは4.35m奥行きは深いが落盤のため計測できない。入り口付近に1471年(文明3)に建った祠がある。この洞穴に接して東側に、入口幅11m、高さ4.35m、奥行8.4mの馬蹄形の小洞穴がある。この洞穴はシラス層に作られ、天井中央には円筒形の浸蝕穴がある。

西方90mに、元権現洞穴がある。標高79.5mに開口、入口幅21.65m、高さ21.65m、奥行17mあり、入り口付近は落盤が酷い。

### 調査の経緯

黒川洞穴は、1952年(昭和27)坊野小学校教諭辻正徳の通報で、河口貞徳が発掘し、縄文晩期の黒川式土器を初めて発見した。1964年(昭和39)日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会が、11月18日より7日間、江坂輝弥・河口貞徳が担当して発掘を行った。期間中、八幡一郎・鏡山猛・賀川光夫・鈴木重治がみえ、新潟大学の小片保教授が埋葬遺構の調査に当たった。次に1965年(昭和40)8月14日より7日間の発掘調査を行った。以上は主として東洞穴の発掘で、西洞穴が未発掘のため、1967年(昭和42)



第1図 黒川洞穴の位置

7月29日より11日間、西洞穴の発掘を行った。

### 遺構と遺物

#### 東洞穴

洞穴の底面は平坦で自然の床面となり、上壁は床面へ傾斜して、周壁を形造り、居住に適した環境を形成している。天井の中央の竪穴は水の流れ落ちた跡と思われ、床の周辺は、周壁に沿って溝が作られ、谷へ排水する構造となっているが、現在は洞穴の天井から床面まで、全面が乾燥している。

最下層。発掘の結果、洞穴ができて最初の堆積は、天井から落下したシラスの二次堆積土で、殆ど有機物を含まず、この中に只一個の尖底(丸底)隆帯文土器が発見された。(第4図)。この土器は洞穴最初の住人が残したもので、縄文草創期の土器である。この層が、東洞穴の最下層である。

B層。下から二番目の遺物包含層は、B層と名付けた。範囲は狭く、洞穴の中央から入り口へ向かって分布し、幅は4.5m長さは5mで(第2図)厚さは20～30cmで、茶褐色・茶灰色・混貝層などがみられ、包含する土器は甕式である。

A層。B層の上面は、二次堆積のシラス層で、洞穴の全面が覆われており、その上にA層が洞穴床面の全面に堆積している。A層は中央部は薄く、周辺部に厚く堆積し、灰白色。赤灰色・薄灰色等の薄層が重なって40～50cmの厚さを示している。B層の縄文早期に続く前期から晩期に至る堆積で、曾畑式・春日式・阿高式・指宿式・市来式などを包含し、最後に晩期の黒川式の時代の遺跡が形成されたものである。従って遺構はいずれも晩期のもので、炉跡・

埋葬跡・土壙などである。

[炉跡] 奥壁より5.5m, ほぼ洞穴の中央にあって、床面より深さ43cm, 径90cmの土壙を礎で固めたものである。A層から掘り込まれており、黒川式の時期のものである。

[埋葬跡] 奥壁より2.5m。第2図の3号の土壙で、深さ40cmの壙底に、頭部を西にした仰臥屈葬である。骨盤を胸部の下に、尾椎骨を頭の下に、切断して移した異常な埋葬である。熟年女性。埋葬土壙の南に接して、角柱標石が立てられている。

[7号土壙] 南側壁に沿って設置。径1.2m—0.85mの楕円形、深さ40cmの粘土で固めた土壙である。穴は粘土壁で二分されており、木炭・貝・獣骨・ヘヤビン・曾畑式・市来式・条痕文土器片等が出土している。[6号土壙] 奥壁より2.3m。径70cm, 深さ約40cmの円形土壙。木炭多量・貝類・獣骨・鳥骨・黒川式・西平式・並木式土器片出土。特に嚙傷のある獣骨が注意された。[5号土壙] 奥壁より1.25m, 径約0.65m, 粘土と礎で壁をかためてある。多量のイチイガシ・ハマグリ・カワニナ・犬骨・黒川式土器片が出土した。

[4号土壙] 奥壁より75cm。径1mの不正円形で深さ23cmである。底に平らな石が敷かれている。イノシシ・シカ・鳥骨・カニ・ハマグリ・木炭の他に、糞石二個の出土が目された。黒川式・並木式出土。[8号土壙] 奥壁より22cm, 径1mの不正円形。深さは37cmで底面に平らな石が置かれている。土壙上層部からは、ハマグリ・カワニナ, 中・下層からはアコヤガイ・カワニナ, 木炭・焼骨・後期土器片・轟式・曾畑式・石鏃・貝輪が出土した。

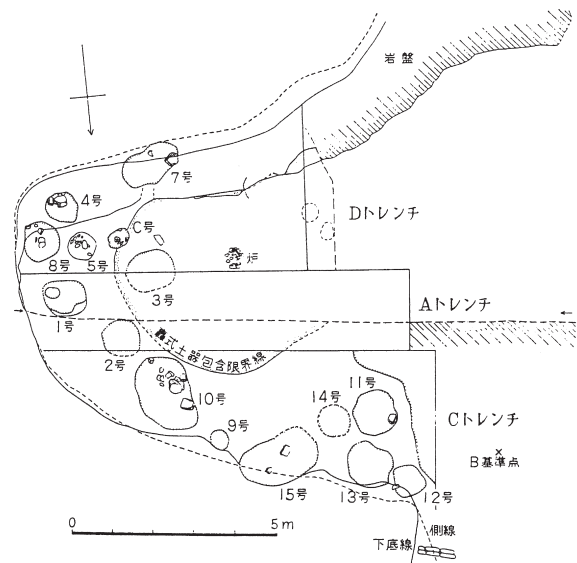
[1号土壙] 奥壁より0.5m, 径1m—0.9mの楕円形で深さ70cmである。シカ・鳥骨・カワニナ・アカガイ・ハマグリ等と、黒川式・西平式・曾畑式・条痕文土器片が出土した。

[2号土壙] 奥壁より1.6m, 径90cmの不正円形。深さ20cm。出土状況は1号土壙と同じである。[10号土壙] 長径2.12m, 短径1.3mの楕円形。深さは60cmである。獣骨片・鳥骨片・貝類と、黒川式土器片が出土した。[9号土壙] 奥壁より4.5m, 径64cmの不正円形。深さ19cm。カワニナ少量, 黒川式2片,

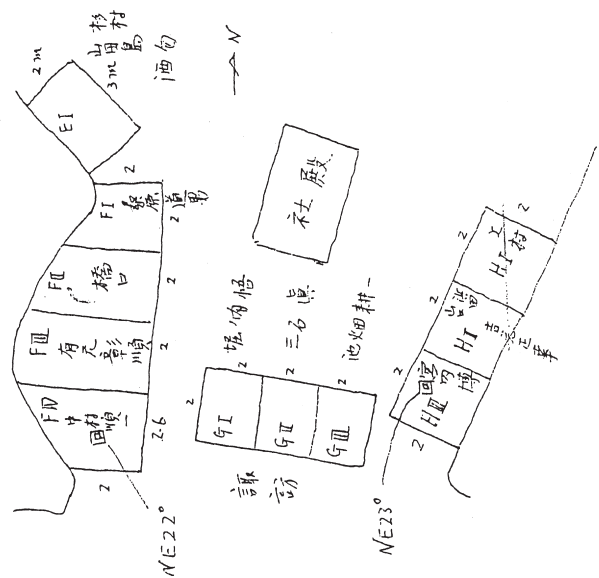
黒曜石片出土。

[15号土壙] 奥壁より4.65m。長径2.18m, 短径1.42mの楕円形。深さ36cm。石皿と出水式・岩崎式・轟式土器片が出土した。[14号土壙] 奥壁より7.25m。上部を切り取られて詳細不明。カワニナ多量出土。[13号土壙] 奥壁より8m。径1.02mの不正円形。深さ22cm, カワニナ多量出土。[12号土壙] 洞穴入り口にある。径41cm。深さ31cm。カワニナ多量出土。

[11号土壙] 13号14号土壙に接して入り口側に位置している。径1.18m, 深さ23cm, カワニナ多量出土。これで11号以下14号土壙までカワニナを大量に



第2図 東洞穴平面図と断面図

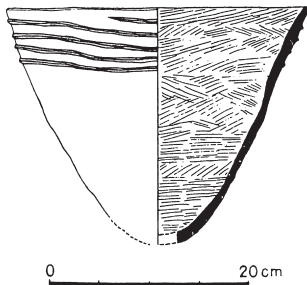


第3図 西洞穴発掘区画図

出土することがわかった。

### 西洞穴

発掘は、社祠を避けて、洞穴入り口の両壁下と、祠の前の空地について行った。表層は全地域に渡って、攪乱層で、縄文・弥生・土師などを出土し、2層以下では、洞穴、左奥部には市来式の包含層があり、入り口左側には、奥行き7 m余りの馬蹄形の小洞穴状の入り込みが発見され、壁際に周溝を巡らし、溝中に阿高式土器・南福寺式土器・出水式土器・市来式土器・西平式土器・黒川式土器・弥生中期の土器。貝輪・筭・骨針・貝製飾・イノシシ・シカ・アナグマ・サル・ウサギなど、多量の遺物が出土して、貯蔵庫のような状態であった。洞穴入口では、落盤の下に、曾畑式を上、轟式を下にした包含層の層序が発見された。以上の結果西洞穴は縄文早期からヒトの生活が始まり、晩期に至り、弥生時代も若干の痕跡を残すに至った事が判明した。

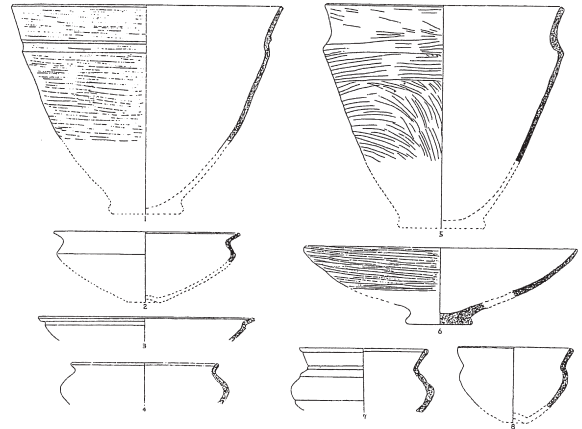


第4図 隆帯文土器

黒川洞穴で、最も注目すべきものは、最下層の隆帯文土器と、上層の晩期遺構・遺物である。第4図の隆帯文土器は、東洞穴のシラス層直上のシラス再堆積層から出土したもので、地層でも、串間市大平遺跡の隆帯文土器出土と同様であり、土器でも同類が出土しており。器面調整に、貝を用いる点でも一致している。同様な隆帯文土器は、鹿屋市伊敷遺跡・鹿児島市掃除山遺跡でも出土しており、始良町鍋谷遺跡下層出土の隆帯文土器と共に、縄文草創期に属するものと見られる。

黒川洞穴は、九州で最初に晩期の黒川式土器が発見された遺跡であり、とくに東洞穴の上層が顕著である。第5図が黒川式土器で、遺跡名を採って名付けた。精粗二種に別れる。精製土器は水簸した土を用い、黒色研磨し、丹塗したものもある。器形は浅鉢形で、頸部はくの字状に屈曲して外反し、口縁端は丸く仕上げ、内外に沈線を巡らす。底部は小さな平底である。小型の土器が多い。粗製土器は大型で、

胎土は粗く、貝殻腹縁で器面調整するか、内面を研磨するものもある。器形は頸部で鋭く内側へ屈曲して、外反し、底部は張り出した平底である。小型の鉢形粗製土器の内面に、線描きの人と柵を絵描いた



第5図 黒川式土器

絵画土器が、西洞穴から出土している。

黒川式の社会を最も特徴付けるのは、東洞穴の中央奥よりの、埋葬遺構である。黒川遺跡の各時期を通じて、埋葬が見られるのは、この一例だけであり、その特殊性を示しているが、それに加えて、屈葬もさる事ながら、尾椎骨と骨盤を切り取って、遺体の頭と胴部の下に埋めるといった特異な行動を取っている。このことは、被葬者が黒川の人々にとって、如何に驚異的な存在であったかを、示している。しかもこの時期には例のない、標石を建てて記念しているのである。

### 資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

### 参考文献

河口貞徳1952「黒川洞窟」『鹿児島県考古学会紀要』第2号

河口貞徳1967「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会 平凡社

河口貞徳1967「黒川洞穴」『考古学ジャーナル』第13号 ニュー・サイエンス社

河口貞徳1994「南九州草創期の隆帯文土器」『鹿児島考古』第28号 鹿児島県考古学会

河口貞徳1957「宮崎県串間市大平遺跡」『日本考古学年報』10日本考古学協会編纂 誠文堂新光社

(河口貞徳)